

# アルコールの語源クフル粉とバラ水

—モロッコ・アラブ医学管見—

泉 彪之助

一九九七年に、アラブ国であるモロッコを初めて旅行した。一般向のツアーに参加したので医史跡というほどの見聞は得られなかったが、アラブ医学の二、三を経験することができた。それを報告したい。

## 一、アルコールの語源クフル粉

アルコール、アルカリ、アルデヒドなどアルで始まる言葉が、アラビア語起源であることはよく知られている。アルは、アラビア語の定冠詞である。アルコールという言葉が本来は酒精という意味でなく、コール粉(クフル粉)というアラブ婦人が眼のまわりに塗る黒い粉、つまりアイシャドウのことだと知ったのは、たしか前嶋信次氏の『アラビアンナイト』邦訳の解説であった。

現代のアラビア語では、コール粉とアルコールとは綴りが異なっている(アラビア語の表記は別稿参照<sup>(3)</sup>)。すなわちコール粉はカーフ(22)・ハー(6)・ラーム(KHL)で、ローマ字表記では Kahl(クフル)、アルコールはカーフ(22)・ハー(6)・ワーウ・ラーム(KHWL)で Kahl(クフル)(ワーウは本来の発音はw、この場合はウの長母音を示すのに用いられている)である(写真1)。Kについている母音符号はウだが、実際の音はウとオの中間なのでコフルという表記法も

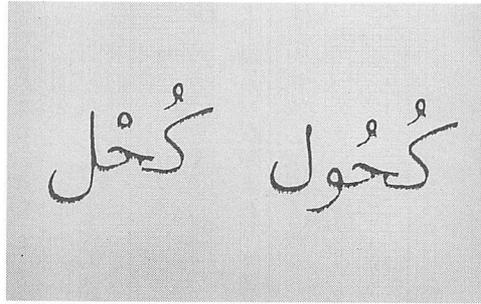


写真1 アラビア語のクフル粉(左)とアルコール(右)

文字(右→左):クフル粉(K・H・L)、アルコール(K・H・W・L)

クフル粉のK、アルコールのKとHの上の符号は、ウを示す母音符号、クフル粉のHの上の小さな丸は、子音単独音を示す符号 文献②より引用

ある<sup>②</sup>。ハー(6)は、「エカオの唇の形をつくったままハと発音する<sup>④</sup>」または「日本語のハより強い音。喉の一番奥を緊張させて、口を円く開いて強くハを発音する<sup>⑤</sup>」という音で、前者では母音のない子音単独音である。これらの語に定冠詞アルがついて、アル・クフルあるいはアル・クフルとなる。『パスポート初級アラビア語辞典』によれば、「冠詞のついたアル・クフルが中世アラブからヨーロッパ社会に入り、それが様々な意味の変遷を経て、最終的にアルコール(酒精)の意味に定まった。それがアラブに逆輸入されてクフルという語になった」という<sup>①</sup>。

英語では、コフルという音をそのまま「KOH」と写し、Oを発音せずに長母音符号として読むのでコールとなる。

このクフル粉がどのような形で売られているのか、全く想像がつかなかった。アラブ国のスーク(市場)では香料を売る一画があり、サフランなどの香料が粉のまま積み上げられている。そのように一キロいくらというふうに売られているのかなと思った。

フェズのメディナ(旧市街)は世界一の迷路といわれているが、その中にたぐさんの店がある。クフル粉を売っているところがないか探したが見当たらなかった。次にスークへ行く予定のマラケシュで探そうと考えた。ところが思いがけなく、サハラ砂漠の北にあるカスバ街道の村の一つ Bouia (ブーイア)の露天市で、このクフル粉を入手することができた。

ブーイアは、カスバ街道の中心地の一つエルフードから、もう一つの中心地ワルザザードに向かってすぐのところ

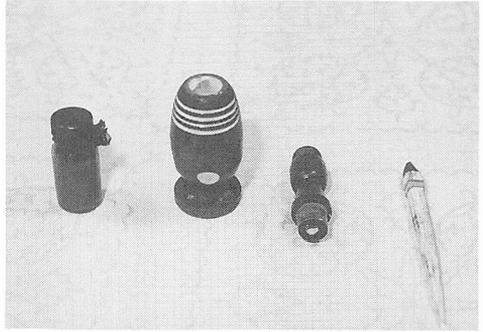


写真2 クフル粉と器具

ある小さな村である。ちょうど市(いち)が開かれていたので、バスを停めてぶら歩きすることになった。店をひろげていた一人の売り子が「クフル、クフル」というので、飛び付くようにして買った。クフル粉は、木製の小さな壺のような器具とセットになっている。本体は黒い粉が小さなビンに入っており、絆創膏のようなテープでビンの首が巻いてある。使うときは器具の蓋をあけて粉を入れ、これに水を加えてとき、それを付属の棒で臉に塗るのだという(写真2)。

露店の写真は撮りそこなったが、地面に敷いた絨毯に品物を広げて売っており、クフル粉はかごのようなものに黒い小さなビンを二〇個ほどならべていた。後でビンごとはかった重さはちょうど二〇グラムだったので、中身は五グラム程度であろう。

アルコールの語源となったクフル粉が、今もこのように民衆の生活に密接した形で用いられていることを知ったのは、貴重な体験であった。

帰国後、あるガイドブックにクフル粉(クホル)について詳しい説明があることを知った。民俗としてのクフル粉については、このガイドブックを参照していただきたい。ただしアルコールの語源であることは書かれていない。文献によれば、クフル粉はアンチモン硫化物で、その用途には化粧用と医学用とがあった。<sup>(6)</sup>アンチモンという言葉自体がアラビア語起源である。<sup>(8)</sup>前嶋信次氏は、クフル粉が眼病の薬としても用いられたとしており、『現代アラビア語小辞典』は、クフルという字の意味を「コフル(目薬)、アンチモニー」と訳している。<sup>(2)</sup>

## 二、バラ水とバラ油

アラブ医学の薬剤として知られているひとつが、バラ水である。

前嶋信次氏の『アラビアの医術』に、ある医師の言葉として次のように書かれている。

「壊死になった腕の治療に」この紐をほどき、馬糞のかわりに樟脳をつけ、それから腕を白檀、薔薇水（バラ水）、および樟脳などの油で清めねばなりません<sup>(9)</sup>」。

マイモニデスの著書とされる書物（疑いもある）に書かれた処方の一例を挙げる（内容は催淫剤的なもの）。

“Die Art eines anderen Mittels: man nehme weisses und rotes Sandelholz, von jedem f. 10 Dr., Akazie und Ramech, von jedem f. 3 Dr., zerreibe und reinige und knete mit Rosenwasser und öle damit die Brust ein.”<sup>(10)</sup>

しかし必ずしも薬剤としてでなく、清涼飲料としても用いられた。「アッバス朝時代」砂糖で甘味をつけ、薑、バナナ、薔薇、桑などの汁で香をつけたシャーベット形式の非アルコール飲料を飲んだが、もちろん過度にはなかつた<sup>(11)</sup>（シャーベットという言葉自身が、アラビア語起源である<sup>(9)(11)</sup>）

この用い方で有名なのは、名将サラディン率いるイスラム軍が、ガリラヤ湖畔のハッティンの戦いで十字軍を破った後の出来事であろう。

「騎士道をわきまえたスルタン（サラディン）は、（エルサレム王）ギーを自分のかたわらにすわらせた。親切に話かけて、相手の気持ちを静めながら、ヘルモン山の雪で冷したバラ香水のシャーベットを勧めた<sup>(12)</sup>」（この訳では「バラ香水」となっているが、バラ水のことである）

イスラム教徒は、宗教上の規定もあつて清潔の保持を大切にしているが、香をたいたり、香水を使うこともよくある。バラ水は、香水、オーデオロンのように用いられ、客のもてなしにも使われた。「アッバス朝」酒宴では、主人も客も、



写真3 バラ水の売店

中央の棚はバラ油、左側の細長い箱がバラ水  
ケラー・ムグナ、モロッコ



写真4 バラ水とバラ油、ケラー・ムグナ製

そのひげに麝香か薔薇水をふりかけ、明るい色の特製の衣服を着用した<sup>(11)</sup>、「現代」お客がくれば玄関まで必ず迎えに出て、お客さまたちに、マー・ワルドとよばれるバラ水をはらはらとふりかける<sup>(13)</sup>」バラがとくに珍重されたのは、伝承にバラは預言者ムハンマドや天使ガブリエルの汗から生まれたとあるからである<sup>(12)</sup>。

このバラ水は、ガイドブックに観光土産として写真が出ている。実際に行つて

みると、モロッコのバラ水の主産地はカスパ街道のケラー・ムグナ (El-Kelaïa M'Gouna) で、ツアーのスケジュールにも組み込まれており、売店(写真3)の看板にも日本語でバラ水と書かれていた。モロッコのバラ水の八〇%がここケラー・ムグナで生産され、五月にはバラ祭りが開かれるそうである。売店ではスプレーにバラ水が入れてあって、サードにそれをかけてくれた。バラ水とバラ油がどうかうのか著者はよく知らないが、この店にはバラ油も置いてあって、いくつか種類があったが、それがすべてバラ油なのか他の種類の花の油もあるのか、聞いてもはっきりしなかった。後にカサブランカ空港の売店でもバラ水を買っていたが、ケラー・ムグナのバラ水(写真4)がピンク色をしていたのに、空港のバラ水は透明であった。赤いバラと白いバラというような、原料の違いによるものかも知れない。

アッバス朝時代には、ファアリスのジュール(現・イランのフィールーザード)がバラ油の主産地として有名で、そ

のバラ水は西のモロッコへも輸出されていたという。<sup>(11)</sup>

### 三、アラブ医学史探書

著者はアラブ医学史を学び始めて一年くらいにしかならないが、医史学会例会で「アラブ医学者の名前」という発表をした。<sup>(14)</sup> それについて医学者名のアラビア語原綴を知るため、アラブ医学史のアラビア語原典をぜひ入手したいと思った。幸い誠実なガイドの尽力で入手できたので、今後アラブ諸国で探書される方々の参考に経験を書いて見たい。

マイモニデス関係の論文によく引用されるアラブ医学史は、イブン・アビ・ウサイビア<sup>(9)</sup>とアル・キフティ<sup>(16)</sup>の著書である。とくにイブン・アビ・ウサイビアは、現在でもひろく用いられる古典である上、著者がマイモニデスの息子とカイロの病院で同僚だったという関係もある。<sup>(17)</sup> 第一に、このイブン・アビ・ウサイビアを入手しようと考えた。

写真5 イブン・アビ・ウサイビアの  
アラブ医学史

イスラム文化やアラビア語の専門家なら、日本でもどこでアラブ書が買えるか知っているのだろうが、著者はそうした便宜がないので、アラブ国を旅行する機会に入手しようと思い、探す場所としてモロッコのフェズとマラケシュ、それに一九九八年に国際医史学会議が開催されるチュニスの三か所を考えた。日本語ガイドブックには書店のことが出ていないが、モロッコの英文ガイドブックには書店のアドレスが出ている。<sup>(18)</sup> ここで探すことにして、前嶋信次氏の『アラビアの医学』に出ているアラブ医学史のリストを写し、それに英語とフランス語で簡単な説明を書き加えた。

詳しい経過は省略するが、英文ガイドブックに出ていた書店は欧文書籍を主に

扱っていて、そこではアラビア語原書は入手できなかった。フェズでこれらを含めて六軒の書店を廻った後、最後にアラブ書専門店 DAR ALBAHIT ALARABI へ到達することができた。この書店名は「アラブ研究のやかた」という意味だと思う。その名前の通り、観光客向きの本などは一切置いてない専門店店で、それまでの書店とは全くちがった雰囲気であった。英語は通じなかったが、書店主は著者が作って行ったりリストを熱心に見た上、「イブン・アビ・ウサイブアは在庫があつたが、二、三日前に売れた。アル・ナデーム(またはアン・ナデーム、書名はいわゆるフィフリスト、『諸学の目録』<sup>19</sup>)は現物がある」といって出して見せてくれた。著者はまだアル・ナデームのアラブ医学史における重要性を知らなかったのと、厚い重そうな本で、また用意した現地通貨が足りなくなる恐れもあつたので購入しなかつた。今だったら必ず購入したのと思う。

イブン・アビ・ウサイブアは注文して取り寄せてもらい、ガイドに郵送料を渡して後で送ってもらうことにしたが、この方法はツアーに同行した人から批判された。アラブ人に頼んでもあてにならないのである。しかし結論からいうと、本は無事手元にとどいた(写真5)。ガイドのアリ氏は、契約時間が終わり支払いをすました後、それから一人で書店を廻るつもりだった著者のことを案じて、わざわざもどつて来て一緒に探してくれ、そのおかげで前記の書店に行きつくことができたのだが、この誠実なガイドを信じた著者の期待は、決して裏切られなかつた。ただ一般的には、こうしたやりかたはあまりすすめられないかも知れない。

DAR ALBAHIT ALARABI 書店の名刺をもらったが、書店名以外はすべてアラビア語で書かれているので、住所を書くことが出来ない。フェズの新市街にあることは確実で、ホテルかインフォメーション・センターで聞けば住所が分かると思う。書店から直接日本へ発送してもらえるかは不明である。

アラブ医学史は首尾よく手に入れたが、アラビア語の力が足りないので、まだよく利用できない。これからゆつくり時間をかけて勉強していきたいと思つている。

後にマラケシュで書店二軒をまわったが、いずれも英語は通ぜずフランス語しか通じなかった。アラブ人がフランス語で書いたアラブ医学史の本がないか探したが、入手できなかった。モロッコで出版される本は、英語よりもフランス語の方がずっと多いようである。

モロッコを旅行して感じたのは、アラブ医学が現代に生きているということであった。アラブ医学史の古典が、立派な装丁で今も出版されている。マラケシュで見た臨床検査会社の看板は、社名をイブン・スィーナとしていた。私たちは、新しい眼でもっとアラブ医学を見直すべきではないだろうか。

#### 謝辞

この研究に援助と示唆を与えられた多くの方々、とくにフェズ市・政府公認ガイド Ali Hayae 氏、フェズ市 DAR ALBAHIT ALARABI 書店に感謝する。

#### 参考文献

- (1) 本田孝一・石黒忠昭編『パスポート初級アラビア語辞典』三〇二―三〇三頁、白水社、一九九七年
- (2) 池田修・竹田新編『現代アラビア語小辞典』三七五頁、第三書館、一九九二年
- (3) 泉 彪之助「アラブ医学者の名前」、『日本医史学雑誌』投稿中
- (4) 四戸潤弥『現代アラビア語入門講座(上)』六頁、東洋書店、一九九六年
- (5) 本田孝一『アラビア語の入門』一八頁、白水社、一九九五年
- (6) ガリマール社・同朋舎出版編『望遠郷7、モロッコ』六六頁、同朋舎出版、一九九五年
- (7) イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注『大旅行記1』一六九頁、東洋文庫六〇一、平凡社、一九九六年
- (8) フィリップ・K・ヒッテイ著、岩永博訳『アラブの歴史(下)』四五四頁、講談社学術文庫、一九九四年
- (9) 前嶋信次『アラビアの医術』二〇、四三、一一二頁、平凡社、一九九六年

- (10) Kroner, H.: Ein Beitrag zur Geschichte der Medizin des XII. Jahrhunderts an der Hand zweiter medizinischer Abhandlungen des Maimonides, 42s., Oberdorf, Bopfinger, 1906
- (11) フィリップ・K・ヒッチェイ著、岩永博訳『アラブの歴史(上)』六四四、六四六、六六五、六六七、六八五頁、講談社学術文庫、一九九三年
- (12) ルネ・グルッセ著、橘西路訳『十字軍』二四九頁、角川文庫、一九七二年
- (13) 片倉もとこ『イスラームの日常世界』五五、六九、一九〇頁、岩波新書、一九九七年
- (14) 泉 彪之助「アラブ医学者の名前」、日本医史学会例会発表、平成九年六月
- (15) Ibn Abî Usaybia, 'Uyûn al-anbâ' fi tabaqât al-atibbâ', 前嶋より引用(表記一部変更)
- (16) Ibn al-Qifti, Ta'rikh al-hukamâ', 前嶋より引用
- (17) 泉 彪之助「モーゼス・マイモニデスの生涯」、『日本医史学雑誌』四四卷一、三号、一九九八年
- (18) Simonis, D. & Crowther, G.: Morocco, a Lonely Planet travel survival kit, Lonely Planet Pub., 1995
- (19) Ibn al-Nadīm, Kitāb al-Fihrist', 前嶋より引用

(老人保健施設 陽翠の里)